

大平さんの真骨頂

河合 良一

われわれの仲間十名余りで大平前総理に初めてお目にかかったのは、十数年も以前のことだったと思います。それから年に数回ずつ何十回合を重ねたが、恐らく誰も覚えていないほどです。総理になられて四、五日もたため折に時間をあけて下さった時は、本当に感激しました。しかし、その時もいつもの大平さんと全く変わらず、目を半分くらい開いて、多少うつむき加減で「何とか努力したいと思っています」とぼつりいわれたのを覚えていません。言葉としては誠に簡単ですが、大平さんの内心はさぞ大変だったろうと思いました。というのは、われわれは何回となく会合を持ったおかげで、大平さんが簡単に結論的に表現される言葉の裏面にあるものを何となく理解していたからだと思っております。

大平さんの発想には、われわれのそれとは次元の異なるものを感じました。「総理になられたら自民党の派閥の問題を何とかまとめて下さい」と誰かがいうと、「君、派閥はあった方がいいと違うのかい？」という返事が返ってきました。派閥がなくなると自民党は活気がなくなる。エネルギーがあるからこそ、派閥同士がぶつかり合って発展し新しいものを造り上げてゆくのだ、総理・総裁の下一系乱れずに一本化してしまつと、官庁のように（？）事務的になってしまう。そこには発展がないということはいわれた次第です。大平さんのいわれることを内容的に理解するにはかなりの努力を要しますが、時間がたつほど味わいが出てくるようです。

いつだったか歴史学の木村尚三郎先生と対談していただいた時、大平さんのお考えの一端が話のなかからはっ

きりと感じとれたことがあります。それは、人間の個人の力には限度があるということです。「百万人と雖も吾行かん」という言葉は男子の心意気を示した句ですが、大平さんはこれに対して、大河の流れを個人の力で止めることはできない。止めることができないどころか無意味である。川の水に流されながら流れの方向を変えようと努力することこそ人間の叡智であり、また人間の力でできることであるといわれたのです。

日本と中国との国交正常化交渉の時、大平さんと周恩来総理との間で談判が行われました。周総理の演説や議論を私は何回となく身近で聞いたことがあるので、論理の通った能弁さはよく知っていました。「ご承知のように、国交正常化の問題は両国にとって都合よく進み、今日の日中友好関係の基礎を作り上げたものですが、その談判の状況は果たしてどんなだったかと一方ならず興味を持っておりましたので、大平さんが中国からお帰りになり、早速その状況をうかがってみましたところ、大平さんは「大変だったよ」といいながら、淡々としてその状況を話されました。何か他人が交渉しているような話しぶりなので、初めはそんなに簡単に話し合いが進んだかと誤解していましたが、だんだんと具体的な話の内容をうかがうにつれて、大平さんとしてはよほどの覚悟をしてこの談判に臨まれたということがよく判ってきました。誠に大変な会議であったようです。また昭和五十三年の終わり頃、中国との経済協力についてお話をうかがう機会がありました。「中国の経済再建、これに対する日本の協力、こういった問題については決してあわててはいけない、じっくりと、しかも長い時間協力し続けることによって本当の成果が得られるのだ」というのが持論で、何か大平さんの真骨頂が現われているようでした。

大平さんの読書も大変なもので、上、中、下、三冊の新聞書の一部分に眼を通しただけの私はその本の話をして、もうすでに三冊とも読み終わっておられるので、すっかり驚いたことがあります。われわれも忙しい忙しいという前に、大平さんのようにもっともっと本を読み、勉強する必要があると痛感します。(小松製作所社長)